

目的 今日ひとり老人の圧倒的多数は同居家族によって介護されている。老人の情緒的安定を考えると、家族による介護が望ましいといえようが、家族（特に主たる介護者）の身体的精神的負担は非常に大きい。そこで本報告はひとり老人の日常生活を支えている介護者の意識を①犠牲感 ②適切性評価 ③介護の交代 ④介護者への感謝 ⑤家族の協力 ⑥老人の自主性尊重 の側面から分析する。さらに、介護の規範意識、介護継続意欲を検討し、両者の関係および介護継続意欲の規定要因を探るニヒを目的とする。

方法 長野県内の市町村を単位とし、市と町村の対象者が同数になるようにするとともに、東北中南信の地理的条件、ひとり老人の人口比率を考慮して調査地域を設定した。調査対象は6ヶ月以上ひとり老人と同居している主たる介護者（老人が入院している場合は除く）。調査期日は昭和55年7月1日～31日、調査方法は調査員がひとり老人同居世帯を訪問し、調査の主旨を説明して留置方式で密封されたものを回収した。対象者数2138、回収票数1840、有効票数1650（77.2%）である。

結果 ①介護の規範意識は老人と介護者の続柄によって異なり、老人が配偶者の場合の方が老親の場合よりも介護義務意識がかなり強くなっている。②介護の規範意識の低いものは介護継続意欲も低いという相互関係が分析された。③介護継続意欲を介護意欲と介護継続意志の有無を軸にして4タイプに分類すると、介護意欲、介護継続意志がともにあるタイプが最も多く、約6割に達している。老人との人間関係、在宅介護に対する価値観、介護の犠牲感、家族の理解・協力等の要因が介護継続意欲を規定している。